

アカデミア メランコリア (第18回) (若手のコラム)

広島大学 生物圏科学研究科 小原 静夏

創価大学の菅井さんよりご指名をいただき、今回のコラムを担当させていただきます、広島大学博士課程後期2年の小原と申します。私は広島県東部海域(備後灘)をフィールドとし、植物プランクトンの生産速度や種組成の季節遷移を、それらに係わる海洋環境と合わせて解析しています。私は毎月フィールドに出ておりますが、ほとんどの月で地元の漁船を傭船し調査を行っています。それは私の研究フィールドが沿岸に近い小さな海域である、とともに、地元の漁業者の方々と一緒にいる研究であるからです。このコラムの趣旨に合っているかはわかりませんが、今回は私が日々の調査で感じた漁船による調査の魅力と、漁業者とともに行う研究(海底耕耘を例に)について思うところを書きたいと思います。



調査のある朝は6時前に研究室に集合し、指導教員の先生の自家用車に荷物を積み込みます。車で2時間ほどかけて拠点である漁港に移動します。調査には人手が必要なので研究室の学生2、3人に協力してもらっています。漁船なので採水器や測定機器などは手で降ろします。水深は最大でも25m 足らずですが手作業だとなかなか腰にきます。また移動中は野晒しになるので真冬は寒すぎて手足の感覚がなくなります。と書くと、とてもつらい調査のようですが、実際には私も、手伝いに来てくれる学生も、フィールド調査をおおいに楽しんでます。研究室にこもり実験や勉強に勤しむ日々に対し、潮風が当たる漁船での調査はとても刺激的です。走行中に海を眺めていると、海鳥が船についてきたり、ボラが海面から飛び上がったり、ときにはスナメリが背中を出したりするのがみえ、海を身近に感じられます。また、船長である漁師さんや共同研究者である県水産課職員の方々に、最近の漁や海の様子を聞き、生け簀にいるさまざまな魚介類について教えていただきます。このように漁船での調査は、大学の実習よりも実践に近い学びの場になっています。また漁船で調査する際の利点は、何と言ってもその機動力の高さです。走行中、気になることがあればすぐに停まって採水できますし、当日に定点を追加することも容易です。沿岸近くをフィールドとする研究にとって、漁船は非常に実用的な調査船といえます。

さて前述のとおり、私の研究は漁業者の方々と一緒にしています。その中で最も典型的な事業は「海底耕耘」です。数年前より海底ゴミの回収や海底環境の改善などを目的として、地元の漁業者によって底引き網漁の漁具を改良したものを船で曳き海底を耕す「海底耕耘」が行われています。私たちは海底耕耘の前後に調査に行きその効果を検証しました。海底耕耘は、漁業者が自らの手で自分達の漁場を改善できる事業です。ただ、海底ゴミの回収については目に見える成果があるものの、環境の変化は目には見えづらく、その効果はわかりにくいです。そこで私たちは調査で得られた環境の変化を目に見えるかたちにして漁業者の方々の前で発表し、漁業者の方々とその効果と今後について考えました。このような事業はすぐに大きな効果が得られるわけではありません。だからこそ私たちが、効果を検証する調査を行ったり、他の海域と知見を共有したり、研究の面からサポートすることでより持続的で効果的な事業に発展させることができるのではないかと考えています。

アカデミア メランコリアとはかけ離れた内容になってしまいましたが、今後このコラムをきっかけに皆様とお話できる機会がありましたら、大変嬉しく存じます。